

場の観点から認知を捉える

－主観的把握と客観的把握再考－

大塚正之（早稲田大学）、岡智之（東京学芸大学）

1 近代社会のフレームとしての主観と客観

これまで、しばしば、英語は客観的に事態を把握するのに対し、日本語は主観的に事態を把握するため、英語は客観的に表現することができるが、日本語は、なかなか客観的に表現することが難しい言語であると言われてきた。しかし、果たして、そのような理解が正しいのであろうか。このことを検討するため、まず、近代社会における主観と客観とのフレームはどのような性質を持っているのか、そもそも主観と客観とを相対立する二項として把握をしてきた近代のフレームワークが現代科学の観点からみて果たして妥当なものなのか、もう少し別の観点から捉えなおす必要があるのではないのかというのが本論考のテーマである。そこで、まず、近代に於ける主観と客観とのフレームワークから出発することにする。

主観と客観とを二項対立的に捉える思考は、デカルトに始まると言われており、一般にデカルト的二元論と呼ばれている。当時、近代科学としてニュートン力学が誕生しつつある時期であり、ニュートン力学の観点からすれば、すべての物体は、位置と運動量を持っており、ある時点における位置と運動量が決まれば、次の時点におけるその物体の位置は、必然的に定まると考えられていた。 $f = m a$ というニュートンの運動方程式によれば、時空は絶対であり、そこにおける物体の運動は必然性を持つことになる。そこでは、個物とその因果関係によってすべてを理解することが可能な世界がある。しかし、そうなると、人間の意思の自由はどうやって確保されるのか。魂は不滅であり、人間には自由意思があるというためには、どうしても客観とは別のところに主観があると言う必要があった。そこで、デカルトは、主観と客観は別の存在であり、松果体によって接しているとし、そこから、主観は自由であるが、客観は必然であると位置付けたのである。この主観と客観とを区分することによって、客観から主観的要素を排除し、どこまでも主観の介入しない世界を解明するのが科学的態度であるとされ、逆に主観がそこに入り込むことは、客観性を害するものと捉えられたのである。これが近代科学のベースに据えられることによって、あらゆる分野において、科学的思考の基礎に、この客観と主観とを分離して、客観を探究する学問として科学が定義されてきたのである。

2 近代の主観客観図式の限界と場における相互作用

しかし、20世紀に入り、このようなデカルト的二元論に対する疑問が生じることになった。すなわち、ニュートン力学では、絶対時間、絶対空間という不動の4次元座標として考えられたものが、アインシュタインの相対論によって、時空が物体の存在によって歪むことが明らかにされた。また、量子力学は、微視的世界においては、ニュートン力学は成り立たず、位置と運動量を同時に特定することはできず、主観的な測定態度によって客観が影響を受けること、つまり主観と客観と

は影響を与えあう存在であることが明らかになった。実際、現代の脳科学では、意識（主観）は脳の活動（客観）によってほとんど決められており、脳（客観）から離れたところに自由な意思決定のできる主体（主観）があるわけではないことが明らかになっている。

私達が客観だと思っているものは、純粋な客観ではなく、主観の影響を多分に受けている。例えば、色というものは実在するものではなく、主観的構成作用があって初めて認識できるものである。また、私達が主観だと思っているものは、純粋な主観ではなく、深く客観（脳活動）の影響を受けている。その意味において、主観と客観とは相互作用であることが分かる。この主観と客観とが相互作用するところを「場」として考えるなら、主観と客観とは場における相互作用であると考えることができる。ニュートン力学が個物と因果関係の枠組みで考えられたのに対し、現代物理学である場の量子論は、すべての物理現象を場における相互作用として理解するのである。現在の素粒子論では、この世界には4つの力があると考えられているが、それは弱い相互作用、強い相互作用、電磁相互作用、重力相互作用と呼ばれており、いずれも場における相互作用なのである。

近代科学は、ニュートン力学をベースとして個物と因果関係の枠組みで考えられてきたのであり、すべては要素に還元して組み立てていけば説明することができると理解されていた（これを要素還元主義という）。しかし、このような考え方では上手く説明できないことは、物理学だけではなく、生物学においても明らかになりつつある。すなわち、生物学も要素還元主義の考え方から、生物の設計図である遺伝子を解明し、それを組み立てていけば、生物の成り立ちは、すべて分かると考えられ、ヒトゲノムプロジェクト（人間の遺伝子をすべて解明する計画）が立てられ、21世紀初頭には、ほぼすべて解明できたのである。ところが、遺伝子がすべて分かっても、何故そこから、現実の生命体が生まれてくるのかは明らかにならなかったのである。そこで今世紀に入り、同じ遺伝子を持ちながら生体環境の中でどのようにして表現型に違いが生じるのかを研究する分野（エピジェネティクス）が発展しつつある。つまり、遺伝子は、生命体のそれぞれの場において、生体環境と相互作用しながら表現型を形づくるのであり、これもまた場における相互作用として捉えることができる。このように、物理学でも、生物学でも、場から離れて素粒子や遺伝子だけを研究しても、それがどのように発現するのかは分からないのであり、これまでの個物と因果関係のパラダイムから場と相互作用のパラダイムへとその基本的枠組みを作り直すことが必要な時代に入っているのである。したがって、言語学においても、個物と因果関係のパラダイムの中にある主観と客観との二項対立については、場と相互作用のパラダイムの中にある場における内在性と外在性の二項対立へとパラダイムシフトをする必要があると考えられるのである。それはニュートン力学のパラダイムから場の量子論へのパラダイムへの変換が必要となるのと同じである。

3 「主観的事態把握」の意味

池上嘉彦（2008）「〈主観的把握〉認知言語学から見た日本語話者の一側面」によると、〈主観的把握〉とは、「話者が問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする場合。実際には話者が問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする」ことであり、〈客観的把握〉とは、「話者が問題の事態の外に自らの身を置き、その事態の傍観者、ないし観察者として客観的に事態把握をする場合、実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は（自分の分身をその事態の中に残したまま）自らはその事態から抜け出し、事態の外に身を置いて、傍観

者、ないし観察者として客観的に（自分の分身を含む）事態を把握する」とされている。また、少し表現を変えて、事態の〈主観的把握〉とは、「認知（そして発話）の〈主体〉でもある話者が言語化の対象とする事態の中に臨場して、いわば〈客体〉と融合し、それを〈主体〉としての自らが体験する」という様相で捉えるものであり、〈客観的把握〉では「話者は認知の（そしていずれは発話の）〈主体〉として、把握の対象とする事態とは間をとり、それを〈客体〉として対立する」とされるという言い方もされている（池上（2006））。ここで「事態把握」も「把握」も、いずれも *Construal* の訳であり、認知言語学の用語であるが、以下では、*subjective construal* を主観的事態把握、*objective construal* を客観的事態把握と呼ぶことにする。

さて、池上(2008)が引用するように、主観的事態把握の代表例としてしばしば川端康成の『雪国』の冒頭の表現、すなわち、「国境の長いトンネルと抜けると、雪国であった」が取り上げられる。これは、その列車に乗っている人が自分の体験的事態をそのままに表現しているものであり、体験的描写であるが故にこれを「主観的」と呼んでいるのである。しかし、上記・池上の定義をみると、「話者は自らがその事態に臨場する当事者」という表現もされており、ここで話し手のいるところを「場」と表現してみると、これを場に内在的な事態把握と表現することもできる。つまり、話し手が列車に乗っており、その列車に乗っている場の中で、そこで五感を通して見たり、聴いたり、感じたりしたことをそのままに表現しているのである。我々は、五感を通じてしか外界＝客観を把握できないということを考えると、五感を通じて感じ取ったまを表現するということは、そこにある客観をそのまま表現しているという見方も可能である。

4 客観的事態把握の意味

これに対し、客観的事態把握の代表例として、しばしばサイデンステッカーによる『雪国』の冒頭の英訳が挙げられる。すなわち、*The train came out of the long tunnel into the snow country.*（その列車は、長いトンネルを抜けて雪国に入った）という表現である。このような表現を池上（2008）は「事態の外に身を置いて、傍観者、ないし観察者として客観的に（自分の分身を含む）事態を把握する」として客観的事態把握だと言う。ここで自分の分身というのは、実際には自分は列車の中にいるのだが、もし、列車の上空からトンネルの中を透視して、その列車がトンネルから出てくる状況を見ていたとすると、上記のような表現が生まれてくるだろうという趣旨である。つまり、列車に乗っていない第三者の視点からの描写として客観的事態把握だというのである。ここで「事態の外に身を置いて」と表現されているように、事態の中を場とすれば、事態の外からみた把握というのは、場に外在的な表現、把握ということもできる。これは、場の中にいる人間が、実際には五感では感じ取っていないにもかかわらず、頭の中で場の外に視点を創り出して、その視点に立てば、このように見えるだろうという趣旨である。言い換えれば、これは五感で感じ取った客観的な事態から、自分の頭の中で、場の外から見ればこう見えるだろうという映像を主観的に創り出し、その主観的に創り出された映像を言語化しているという意味では、主観的ということもできる。

5 主観と客観の捉え方再考

そこで、改めて考えてみよう。まず、体験的描写というのは、主観的なのだろうか。また何故、体験的だと主観的だということになるのだろうか。その点を考えてみると、まず、私達が外界の客

観性をどうやって把握をするのかと言えば、五感を通じてでしか有り得ないのである。近代哲学の完成者カントが的確に指摘したように、我々は客観というものを五感を通してしか認識できず、そこから離れた物自体(Ding an sich)は、知ることができない。つまり体験から離れたところに客観はない。では客観と言われているものは何かと言えば、それは主観の集積であり、現象学では、これを intersubjectivity (間主観性、相互主観性)と呼んでいる。言い換えれば、その列車に乗っている者と同じ場所において、他の第三者の五感においても同じように感じる場合には、相互主観性が高く、客観性があるということになり、他の第三者にとってそのように感じられない場合には、相互主観性は低く、客観性がないということになる。言い換えれば、これまで主観的と表現されていたものは、相互主観性の程度の意味ではなく、体験的であるという点に着目したものであって、そうだとすれば、それは、主観、客観の問題ではなく、その場に内在的か外在的かという観点から捉えるべき問題だったのではないかと考えることができる。

それでは、第三者的描写というのは、客観的なのだろうか。それは相互主観性の高いものなのだろうか。私達が行動するとき、実際には、私達の五感で感じとったものをベースとしながら、それを少し離れた場所から眺めると、どのように見えるのかという視点で捉えることが可能である。何故、それが可能なのかと言えば、これまでの体験から、視点を場の外に移して離れたところから観ると、このように見えるだろうという推測ができるからである。しかし、実際には、実在するのはその列車に乗っている人がその五感を捉えて得た情報をベースとしている。実際にどうなのかはその人も分からないし、第三者にも分からないことである。雪国の冒頭の体験は、五感で捉えたものをあるがままに描いているのだが、もし、このような事態をサイデンステッカーのように描いた場合、実際にそのような客観があるのかは分からないのであって、その人が頭に思い描いただけの極めて主観性の高い映像でしかないかもしれない。このように考えると、第三者的描写と言われているものは、その場から少し離れたところから観た状況を描く描き方であって、実際には観ていないものの、場に対し外在的な場所に行って眺めたら、このように見えるであろうという意味で、客観的ということばが使われているのである。実際に第三者が観れば、同じように感じられるのかは分からないことである。

そのように考えると、これは主観と客観の問題ではなく、場に対し内在的か外在的かの問題であることが見えてくるのである。誰でも、その列車に乗って、見えるものを描けば、全ての人が主観的事態把握と言われている状態が見えて来るであろう。反対に、誰でも、その場の外に視点を置いて、外から、この語り手の置かれている状態を見ると、いわゆる客観的事態把握と言われている状態が見えて来るであろう。

しかし、そうだとすると、何故、日本語では、場に内在的に表現することが多く、反対に英語では、場に外在的に表現することが多いのであろうか。両者の違いは何故生まれてくるのだろうか。

6 場と言語

ここで、改めて場とは何かを考えてみよう。私達が音声と言語として利用しはじめたとき、それは何らかの形で何かを誰かに伝えようという動機から始まったものと考えられることができる。空から突然ことばが降ってわいてきたのでなければ、そこには、お互いに人と通じ合いたいという動機があったはずである。そして、ことばが通じる時空は非常に限られていた。多くの時間が経過すれば、記憶の彼方に消え去っていき、多くの距離があれば、大声を出してもコミュニケーションを採るこ

とはできないだろう。同じ話が続いていると感じられる短期記憶が続く範囲の時間的枠組みの中で、かつ、ことば（音声）の聞こえる範囲の空間的枠組みの中で、コミュニケーションの行われていたはずである。そこで、この時空を、ここでは「場」と考える。そうすると、まず、文字のない時代の言語というのは、このような場の中で語られていたはずである。何故なら、場から離れてしまうと、その音声は記憶からは消え去り、聞き手には届かず、意思疎通は不可能になるからである。この範囲を〈今ここ〉と表現すれば、言葉は、〈今ここ〉という場の内部において誕生したと表現することもできる。

7 場からの離脱と言語の多様化

初めての言語が場から誕生したとすると、その初期の段階では、話し手と聞き手とは、同じ場の中にいるので、五感で同じようなものを感じ取っているし、同じ場にいるからには、その人間関係も場の状況によって自ずから明らかな状態にあったといえることができる。そこでは、〈今ここ〉しかないで、今ここにおいて五感で感じるができるものや動きを仕草や音声と結びつけることになる。ものと結びつくことで名詞が生まれ、動きと結びつくことで動詞が生まれる。そしてその名詞や動詞の量や質や関係性を表現する言語、つまり形容詞や副詞、空間的、時間的位置関係を表現する語がまず生まれたと考えることができる。そして、その場の中において、場から離れた時空を表現しようと考えた時、過去や未来、かつてみた今見えない遠方のできごととも表現する言葉が生まれ、時制が誕生する。場の状況をそのまま表現する性質を持っている活格言語、能格言語が先に生まれ、場から離れた人に場の状況を説明するため、場の情報がないところで、次第に対格化が進んだものと推測される。例えば「ドアが開く」という名詞＋自動詞の構造から、「風によってドアが開く」という能格的表現が生まれ、次に「風がドアを開ける」という主語＋他動詞＋目的語という表現が生まれることになる。前者（ドアが開く、戦争が始まる）が基本になれば、「ナル」言語であり、後者（ドアを開ける、戦争を始める）が基本になれば、「スル」言語に近づくことになる。おそらく場の中にある言語は「ナル」言語の性質が強く、場の外に出るにつれて「スル」言語の性質が強くなっていき、そこに多様な言語の表層的統語構造に分化して行ったものと考えられる。

また、日本語は主語を省略するとしばしば言われる。果たしてそうだろうか。場の中にいれば、わざわざ主語を言わなくても、主語が何であるのかは分かるので、言う必要がない。もし、昔は、日本も主語を言わなければ通じない時代だったので主語のある言葉が生まれたが、その後、主語を言わなくても通じる時代に進んで行ったので、主語を言わなくなったのであれば、かつてあった主語を「省略」するようになったという表現が正しいかもしれない。しかし、かつては主語を言わなければならなかった時代があったが、その後主語を言わなくてもよくなったという証拠は何もない。むしろ、昔から日本語は、少なくとも会話文の中では、今と同じような主語の使い方をしていたと考えられる。つまり、日本語では主語を省略しているのではなく、昔から場の中で語られてきたので、主語を語る必要がないことが多いが故に主語を使わないと言った方が正確である。言語は社会的必要性から形成される社会的存在であるから、社会的必要性がないものを社会が創り出したりはしないのである。

他方、場の情報が共有されない場面では、場の情報を言語化して表現することが必要となる。場から離れるほど、場の情報は消えていくのであるから、それを言語にして表現することが必要となる。例えば、場の内部において、場の情報として、主語が何であるのか、今がいつで、ここがどこ

かが分かっているのです、今この状態を語る限りにおいては、言語化不要の情報である。日本人がしばしば言わなくても分かるだろうとか、察して下さいとか、言わせないで下さいとかいう表現をするのは、場の情報から読み取って下さいということである。空気を読むというの、場の情報を感知して行動しろということであり、この空気を読まないで行動すると、場違いになってしまうのである。わきまえるという場合、何をわきまえるのかと言えば、場をわきまえるのである。日本語は、基本的に場の内部で使用することに長けた言語であるから、場の内部においては、多くは場の空気が決めてくれるので、多くをいう必要はないし、あいまいなままでも、主語がなくても、言いたいことがしっかりと伝わるのである。日本人同士で日本語を使って語るとき、主語がないので何を言っているのか分からないとか、あいまいなので、何が言いたいのか分からなくて困るということは滅多にない。何故なら、場の情報を共有しているのです、それによって言語の不足している部分をきちんと補っているからである。これが場の機能である。

8 日本語と英語の差異

これに対し、英語は、インド・ヨーロッパ諸語の一つとして次第に他の言語とは異なる発展を遂げ、その汎用性のために場から著しく離れた言語を形成していった。使用される範囲が多民族へと広がるほど、民族特有の場の情報を使うことができなくなり、特定の民族の中だけで使われていた場の情報は、改めて言語化して表現することが必要となる。場の情報が豊かにあるところでは、主語がなくても意味は通じるが、場の情報がなくなると、すべて言語化して表現しないと伝わらなくなってしまふのである。言い換えれば、日本語は、場の情報を豊かに使うことを前提とした言語であり、英語は、場の情報をあまり使わないことを前提とした言語なのである。日本語は、場の情報を豊かに持っているのです、主語がなくても通じるし、あいまいな表現をしても、場の情報を使うことによって間違ふことなく情報の伝達が可能となるのである。そのため、言語だけに頼り、場の情報を読むことができないと、場違いな行動をしてしまうことになる。

また、日本語は自己中心的であると表現される場合があるが、自己中心的なのではなく、自己が置かれている場中心的なのである。自己中心に見えるのは、主語を自己にして考えるからであり、実際の日本人の意識では、そこに自己というものはなく誰でもかまわないという意味では無我的な場合が多いのである。例えば、「長いトンネルを抜けると雪国だった」というのは、別に私でなくてもよく、あなたでも、第三者でもよいのである。場の情景を描いていると考えれば、そこに主語を入れる必要がないことは理解できるであろう。日本語の多くは、場の情景を描いているので、主語は要らないのである。「古池やかわず飛び込む水の音」というのは、私が古池にカエルが飛び込んだときの水の音を聴いているという状況を客観的に述べているのではない。場の情景を表現しているものであり、それを聴いているのはあなたでも第三者でも構わないのである。また、静寂の中で、カエルが古池に飛び込んだときの、響き出される一瞬の水の音という場の情景を表現しているものであり、カエルが飛び込んだかどうかを問題にしているのではない。主題は静寂の中で一瞬その静寂を破る「音」であり、その音は、飛び込むカエルと古池の水とその音の聞き手が一体となって作りだしているのである。飛び込むカエルの動作がなければ、音は生じない。その古池に水がなければ音はしない。それを鼓膜を通して聴きとる主体がいなければ、単なる空気の振動でしかなく音にならないのであり、その場から離れてカエルや古池や聞き手がいるのではない。「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を独りかも寝む」というのも、私が主語のように見えるが、そうではなく、

長い夜を1人で眠る寂しい気持ちがあるという場の中に存在しているということを提示しているのであり、その場の情景を詠っているのであって、それは私でもあなたでも第三者でもよいのである。五感で感じ取った場の情景を描くのが日本語の特質であり、何でも主語を立てなければならない英語とは異なるのである。このような主語を必ずしも必要としない言語を主語を必要とする言語に変換することは、そもそも不可能な場合があるということを前提にして、少しでも近い表現を考えるほかないのである。何か正解となる訳があると考えると、それは間違いであり、そもそもないものがあるはずだと仮定をして表現しようとしても無理があるという認識から出発する必要がある。

9 日本人の英語教育

日本人が英語を苦手とする要因の一つは、英語には日本語にない発音が多くある、語順が逆であり、後ろから訳さないといけないなどの音韻論的、文法構造的な問題もあるが、それはさほど本質的な問題ではない。最も大きな点は、日本語が場に内在的な視点において語るのに適しており、また、場の情報を多く使ってコミュニケーションするのに適した構造を持っているのに対し、英語は場に外在的な視点において語るのに適しており、また、場の情報をほとんど使わずにすべて言葉にしてコミュニケーションするのに適した構造を持っていることである。

したがって、日本人が英語を学ぶ場合に、まず、場に内在的な語りの視点を場に外在的な語りの視点へと転換することが必要である。今、話そうとする事柄について、少し距離を置いて、少し高い視点から描写する視点を持つことが大切である。例えば、「国境の長いトンネルを抜けると、雪国であった」とあれば、列車が長いトンネルの中を走っている場の外からみた情景を思い浮かべ、更にその列車がトンネルを抜けると雪の降り積もった場所に出て来る情景を思い浮かべる。そうして思い浮かべた場の外からみた状況をイメージして、それを英語にすることを考える。

次に場の内部にあった非言語的な又は内言語的な情報を、意識的に言語化することが必要である。例えば、日本語では主語を言わなくても聞き手に分かるが、場を共有していない人（聞き手、読み手）に対しては、主語を言わないと分からないということになる。場の内部の情報を代名詞で表現している場合、場がなくても分かる名詞にする必要がある。また、いつどこでという時空に関する情報も場の内部では当然に分かるのだが、英訳するときには、これも言語化する必要がある。この「視点の外在化」と「場の情報の言語化」を行ってから、語順と発音に注意をして英語化することで、よりスムーズに正確な英語表現が可能になると考えられる。ただし、先ほど述べたとおり、日本語には主語は誰でもよいという形で場の情景を表現する場合があります、これはもともと主語がないので、そこで主語を特定明記すると、不正確になってしまうのは避けられない。

10 外国人の日本語教育

これに対し、外国人が日本語を学ぶ場合に注意すべきことは、語順や発音の修得とは別に、「視点の内在化」と「場において共有する情報の非言語化」を行うことが必要である。できるだけ今ここにおいて五感によって感じ取れる表現に組み替えながら、今ここにおいて共有化できる事柄は、言語表現をしないということが重要である。そのためには、日本における場というものを感じ取ることが必要であり、多くの非言語的情報を採り入れる訓練が必要となる。

例えば、**The train arrived at Kyoto station.** を直訳すれば、「その列車は京都駅に到着した」となるが、場に内在的に表現すれば、「京都駅に着いた」だけで十分である。内在的にみれば、「その

列車」というのは、その場の中で語り手が乗っている列車であることが場の情報として分かっているので、言語化する必要がないのである。

また、**Do you know my bag?** を直訳すると「あなたは私のバッグを知りませんか」となるが、話し手が聞き手に質問をする場を考えると、「あなたは」と「私の」は不要であり、質問する場合は「か」を文末につけるよりも、末尾を上げて発音することで足りるので、「バッグ、知らない？」でも十分な場合がある。

11 まとめ

以上のように、場という概念を導入して、これまでの主観的事態把握、客観的事態把握と呼ばれたものを、場に内在的事態把握、場に外在的事態把握として理解することによって、例えば、以下のように考えることができるようになる。

まず第1に、日本語は決して主観的な言語ではなく、場に内在的な言語であるということ。したがって、場に内在している者の間では、正確なコミュニケーションが客観的にできるのであって、決して主観的で他者に通じない言語ではないということである。したがって、場に内在的であることについて、全く引け目に感じる必要がない。むしろ、場の情報を巧みに利用することで、わずかの語によるコミュニケーションを可能とする優れた言語であると言うべきである。外国人が日本語の習得が難しいと感じるのは、場の情報を上手に使うことができないからである。場の情報から切断して言語だけを翻訳しようとするため、場から切り離された言語だけが一人歩きをし、主語が分からなくなり、あいまいで何を言っているのかはつきり分からなくなってしまうのである。

第2に、日本語は、基本的に場の情景を表現する構造を持っているから、そもそも主語を必要としていないということ。言い換えれば、西欧は何でも主語を立てる必要があることから宗教も一神教になってしまうが、日本語は、神道も仏教もその他八百万の神を受け入れる場というものに適合できる構造を持っているので、対立することなく、主語的には矛盾するものも包み込むことができる。「長いトンネルを抜けると雪国だった」というのは、その情景を描いているのであり、誰がトンネルを抜けたかは別に問題にしていないから、主語を立てる必要はないのである。「京都を出ますと次は大阪です」という場合に誰が京都を出るのかを問題にしていないのと同じである。英語でも、場の情景を描く表現があるので、本来、主語は不要であるはずなのに、無理やり主語を立てようとするから、**It rains.**のような意味のない主語になってしまうのである。日本語では、「雨だ」で済むことである。場の情報を伴うことによって、日本語は主語がなくても意味不明にはならないのである。

第3に、日本語では場に内在的な事態把握をする傾向があり、英語では場に外在的な事態把握をする傾向があるということから、日本語と英語の構造的な差異を明示することができるということ。どちらが優れているとか、どちらが進んでいるとかいうことではなく、構造の違いとして理解することができるのであり、したがって、西欧が優れた完成型で、日本語はその完成型に至っていない劣った言語であるかのような見方が根本的に誤っていることをはっきりと示すことができるのである。

第4に、日本語は内在的に事態を把握する傾向があるので、これを英語のような外在的に事態を把握する言語に転換するときは、一度視点を外在化させ、かつ、場の情報を場の外にいる人間にも分かるよう言語化して表現することが必要となる。この構造的差異を考えないで、場の情報から切

断し、内在的なことばだけをそのまま翻訳しようとするので、なかなかうまく行かないのである。

第5に、英語は外在的に事態を把握する傾向があるので、これを日本語のような内在的に事態を把握する言語に転換するときは、一度視点を内在化させ、かつ、場の情報にできるものは場の情報に転化させて、必要な範囲で言語化して表現することが必要となる。場の情報を言語化することで、主語がある表現、あいまいさをなくす表現が可能になる半面として、場の情報を採り入れることで、主語を必要とせず、あいまいなままでも齟齬のないコミュニケーションが可能となるのである。

第6に、日本語には主語がなく、あいまいな表現が多く、そのため、外国人には分かりにくいと言われるのは、場に内在的な視点を取り、場の情報を使っているのに、それから切断して言語だけを取り出すからであって、場の外に対して日本語を使う場合には、視点を場の外に移し、場の情報を言語化して付加することで英語と同じ構造を創り出すことが可能となる。

最後に、以上は、日本語と英語の一般的な傾向から言えることで、実際には、どの言語も、場に内在的表現、場の情報（その一部はコンテキストとなる）を組み入れた表現を持っている（特にスラングや会話文）ので、改めて、ちょうど生命体の中に細胞を置いて考えるのと同様に、どの言語でも、その言葉が話されている場の中にその言葉を置いて、場の情報と言語表現とを一体的に考えることによって、言葉の働きをより实际的に理解することが可能となるのである。

<補足論考>

「寒いね」と話しかければ、「寒いね」と答える人のいるあたたかさ」（俵万智『サラダ記念日』）

本稿では、本文の論考を補足する形で、認知言語学会では自明とされている「主観的把握と客観的把握」という事態把握の仕方を再検討し、「場を基盤とした内在的把握と外在的把握」という仕方で捉えなおすことの有効性を示してみる。

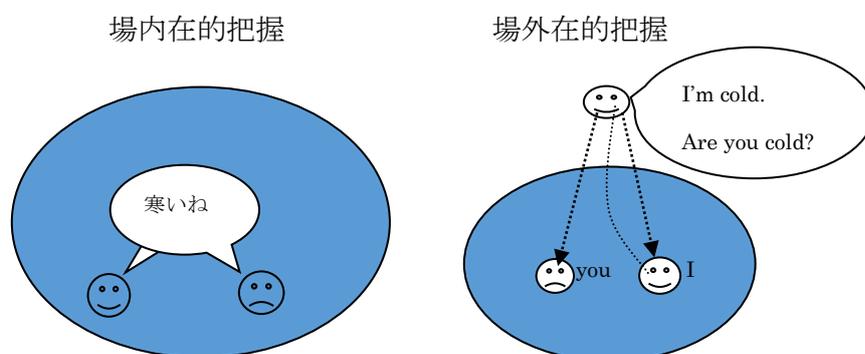
まずは、主観的把握と客観的把握の定義を確認しておく。池上(2011)では「事態把握の2つの基本類型」を次のように定義している。すなわち、主観的把握は「話者が問題の事態の中に自らを置き、その事態の当事者として体験的に把握する」、一方、客観的把握は「話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする」ということで、それを言い換えるとそれぞれ、主客合一か主客対立に当たるという。このような、「主観的把握」と「客観的把握」を場の観点から再定義すれば、「場内在的把握」は「今ここの場に話者すなわち認知主体が内在したままの把握」で、「場外在的把握」とは、「今ここの場から認知主体が観念的に離れ、場の外から見た把握」となる。

「場内在的把握」の典型的な例として、日本語の「寒い」という発話を検討する。「寒い」という発話は、「今日は寒い」「ここは寒い」などの場合、「今、ここ」の場の状況を述べたものであり、場の状況と主体の感覚が一体化した発話である。（日本語では、「私は寒い」と「私」を言語化して言うこと自体不自然である。）主体は、場の状況に影響されて、「寒い、寒い」と言わされている（発話が場に規定されている）。あるいは、「寒い」ということはもうわかっている、会った他者に対して「今日は寒いですね」と述べる。これは、「寒い」という「体験」を共有していることを確認することで、「私はあなたと同じ場にいる」という共有感を得たいということであって、日本語のコミュニケーションが、天候のあいさつから始まることが多いのも、日本語が場の共有を前提とすることの一つの表れということができるかもしれない。それはさておき、「寒い」という状況を共

有する場においては、自己と他者の対立もなくなっており、いわば、場＝事態＝体験＝感覚、自他すべてが一体のものとして同じく「寒い」のである。「場の内在的把握」とは、典型的にはこのような状況をいうのではないかと思われる。

一方、英語では、話者の感覚を言うには、人称代名詞をつけて「I am cold.」と言わなければならない。このとき、認知主体は、「今この場」から出て「私」を対象化して述べている。二人称や三人称も同じく、「You are cold. He is cold.」などと述べられるのは、一人称と対等な立場で客体化して述べられているからであり、これは、典型的な「場外在的把握」である。

日本語は感情形容詞に「人称制限」があると言われるが、「寒いね」と話しかけて「寒いね」と答える対話では、人称は不要である。「私は寒いけどあなたは寒い?」「私も寒い」のような発話もあり得るだろう。それは日本語でも意図的に「場外在的把握」で発言することが可能であるということだが、「私」や「あなた」をことさら出す発話は日本語では不自然である。あえて言えば日本語を教える教室で、日本語教師と外国人同士が話している発話のように感じられる。(感情形容詞の「人称制限」が、「主観性」や「自己中心性」の指標になるという議論の問題性の詳細は別稿に譲りたい)。



次に、「主観的把握」を事態の「体験的把握」と定義すること、この「体験」を「自己中心的」と言ってしまうことの生み出す問題性について検討する。

池上(2004)では、「<主観的事態把握>とは、<自己中心的>な視点で事態が<体験>として把握されること」と定義しており、「ここで言う<自己中心的>という限定は、事態把握の仕方が<自己>対<他者>という構図に基づいていること」としている。また、体験とは、「発話の主体の中において生じる<私的>な過程であり、本人自身によってのみ直接<接近可能>なものであるが故に、すぐれた意味で<主観的>な出来事と言えよう。」としている。が、はたしてそうだろうか。

「寒い」という「事態」が、場のほとんどの人の共有事項とされている状況で、「寒い」という「体験」は、それ自体「主観的」とも「自己中心的」とも思えない。同じ場において体験を共有しあっている対話者同士は「自己」と「他者」として分離しているとも考えられないのである。むしろ、場から出て、自他を同じように外から眺める「場外在的把握」の方が、自己中心的(場から超越的な認知主体の目から見るという意味で)であり、自他对立という構図に基づいているとも考えられる。

なぜ、このように主観的＝自己中心的というような規定をしてしまうかということ、それはそもそもラネカーの「主体化」に関する議論に基づいているからと思われる。

(1) Vanessa is sitting across the table from Veronika. (最適観察構図)

(2) *Vanessa is sitting across the table from me.* (「主体化」。自己の客体化。)

(3) *Vanessa is sitting across the table.* (最大の「主体化」。自己中心的観察構図)

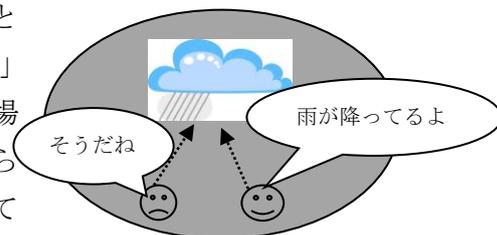
おなじみのラネカーの主体化の例を見てみると、(1)の「ベロニカから見てバネッサがテーブルの向こうに座っている」という、客観的な見方をラネカーは「最適」な見方といい、(2)の「私から見てバネッサがテーブルの向こうに座っている」という、客体的な事態に主体(私)が入り込んで、見るという視点が「主体化」となり、(3)の「バネッサがテーブルの向こうに座っている」というように、自己がゼロとなり、完全に事態の中に入り込んでしまうことを、最大の主体化であり、これを「自己中心的」な見方といている。つまり、客観的見方が標準であり、そこからの逸脱として「主体化」を言っているのである。このような見方自体は、山梨(2009)でも言及されているように、むしろ「欧米言語の自己中心的な主観」ではないかと思われる。池上(2004)では、むしろ、日本語では、「主観的事態把握」がプロトタイプであり、そこから「客観的事態把握」が派生されるという枠組みの修正をしているが、依然、「主観的」＝「自己中心的」という見方はそのまま受け継がれている。(3)のような捉え方こそ、「場内在的把握」であって、そこでは「自己」(＝認知主体)が場に埋め込まれ、言語化されない。自己がゼロ化されるということは、文字通り自己が消去されるのであって、「自己がない」ところで「自己中心的」になるというのは、考えてみればおかしな話である。(1)のような見方こそ、「場外在的把握」であり、常に認知主体の絶対的な視点からものを見ていることから、むしろ「自己(＝認知主体としての意味)中心的」であるという見方もできる。

次に、池上(2004:36)では、「人間の言語の文のもっとも基本的な形式は、極限的なく主観化>を経た文—具体的には、国語学で言う<現象文>のように、話し手が事態を<体験>として提示する文—ということになる。<現象文>の意味は発話の主体自身の直接的なく<体験>と関わるものであり、それ故に、もっともすぐれた意味で<主観的>なものである。」とし、「雨が降っている」などの現象文は、事態を体験として提示したものとして、極限的な主観化を経た文としている。が、はたしてそうだろうか。現象文を最初に定義した三尾砂(2003:64)は「現象文は現象をありのまま、そのままをうつしたものである。判断の加工をほどこさないで、感官を通じて心にうつったままを、そのまま表現した文である。現象と表現との間に何のすきまもない。現象と表現の間に話し手の主観がまったくはいりこまないものであるから、そこには主観の責任問題はない。」としている。主観を挟まず、事態を見たままありのままに述べた文であって、むしろ、事態の客観的描写である。池上氏は、現象描写文は「驚き」を述べるモノログであるから「主観的」であるとされるが、他者に対して「雨が降っている」ことを知らせる伝達的な機能で使われることもあるわけであるから、すべて独り言であり、すべてが主観的とはいえないだろう。

場の観点から言うと、現象文は、場内在的であるが、認知主体が場の中にありながら、事態とは一定離れてそれを見ているという意味で、客観的でもあるという面を持っている。「寒い」などのように事態の中に完全に主体が没入している場合と違うものとして考えておかなければならない。今までの主観的把握はそのような区別がなく、すべて事態に臨場して体験していると規定することからこのような誤解が生まれてくるのではないかと思われる。すなわち、場と事態そのものを分ける必要があるというのが、本稿での一つの提案である。

自分は部屋にいて窓越しに「雨が降っている」ということに気づいたという場合は、認知主体の視界という場において、事態が起こっているのだが、雨という事態に直接的に影響を受けるわけで

もなく、事態から少し離れた立場からそれを眺めているように感じられる。認知文法の用語で言うと、話者の視界が「最大スコープ」で、「雨が降っている」という事態が起こっている場所は「直接スコープ」ということになるだろう。「場内在的かつ事態外在的」か。このような体験は、むしろ、「客観的」と言えるのではないかと思われる。場の観点から言うと、このような現象文は、「場内在的」であると同時に、「事態外在的」といえるのではないか。この点、場と事態が一体になった「寒い」などのような発話と異なると考えられる。もし、雨が降っている現場そのものについて濡れになっているというような場面を考えると、「ている」表現を使わず、「雨に降られた」のようないわゆる間接受け身文を使うと思われる。（詳細は別稿に譲る。）



以上、「主観的」「客観的」の用語上の問題を指摘した。付言すれば、これが用語だけの問題であればさほど大きな問題ではないかもしれない。が、日本語は「主観的」で「自己中心的」な言語だから、国際的なコミュニケーションができないとか、英語は「客観的」でグローバルな視点を持つことができるから学ぶべきであるとか、言語の優劣を評価する言説に使われるならば、言語社会的に言っても大きな問題になると思われる。

認知言語学は、主体不在の客観主義的言語学のパラダイムに異議を唱え、認知主体の事態把握によって言語の意味が生み出されるという基本的パラダイムを対置し、話し手や認知主体を言語学に復権させたという点で、大きなパラダイム転換を成し遂げたといえるだろう。しかし、あまり「主観性」や「主体」が強調されすぎると、独我論や主観主義に陥ってしまう危険性もある。最近では、生態学的心理学の知見が認知言語学には取り入れられており、それ自体、独我論的な立場を超える試みであると評価できる。ここでは「自己」が言語的に表れない（自己のゼロ化）ことを「エコロジカルな自己」と言うが、やはりあくまで「自己」＝「主体」は強固に存在している。「場内在的把握」では、「認知主体」は「場」の中に埋め込まれ、常に、場に影響され、場との相互作用の中である存在である。「認知主体」が絶対的な視点として中心的位置を占める認知言語学の立場では、「自己中心的」で「主観的」な言語学の枠を乗り越えることはできないだろう。場の言語学は、このような主体の言語学をも含みそれを乗越えるより普遍的なパラダイムを提案することを目指している。「主観」「客観」を超えた言語学より具体的な記述が今後の課題として求められる。

参考文献

- 池上嘉彦（2004）「言語における＜主観性＞と＜客観性＞の言語的指標(1)」山梨正明他編『認知言語学論考 No.3』ひつじ書房
- 池上嘉彦（2006）「＜主観的把握＞とは何か」『月刊言語』2006年5月号
- 池上嘉彦（2008）「＜主観的把握＞認知言語学から見た日本語話者の一側面」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究3』昭和女子大学, pp1-6.
- 池上嘉彦（2011）「日本語と主観性・主体性」澤田治美編『ひつじ意味論講座5 主観性と主体性』ひつじ書房
- 三尾 砂（2003）「文の類型—その2」『三尾砂著作集 I』ひつじ書房
- 山梨正明（2009）『認知構文論—文法のゲシュタルト性』くろしお出版
- Langacker, W. Ronald（1990）'Subjectification', *Cognitive Linguistics*1.

<abstract>

Rethinking of ‘subjective construal’ and ‘objective construal’ from the viewpoint of *ba*

OTSUKA Masayuki (Waseda University)

OKA Tomoyuki (Tokyo Gakugei University)

The framework of ‘subjective’ and ‘objective’ began as the dualism of modern science originated in Descartes. This framework is also based on the paradigm of ‘causal relationship of entities’ originated in Newton’s dynamics. However, this dualism was doubted in 20th century by the principle of relativity or the quantum field theory, and those new approaches suggest that all the physical phenomena be understood as the interaction in *ba*. ‘Subject’ and ‘object’ have also been understood as the interaction in *ba*. *Ba* means place, where human beings and entities interact each other.

In this article, we revisit ‘subjective construal’ and ‘objective construal’, and propose to redefine them as ‘inside the *ba* construal’ and ‘outside the *ba* construal’.

One problem of the term ‘subjective construal’ lies in the egocentric view derived from Langacker’s discussion on ‘subjectification’. Based on Langacker’s theory, Ikegami (2004) claims that Japanese language is subjective and egocentric, which appears to be counter-intuitive to Japanese speakers. Let us discuss the following example. A Japanese says ‘*Samui-ne*’ and the addressee answers ‘*Samui-ne*’. This would be translated in English as ‘Are you also cold, aren’t you?’ ‘Yes, I am also cold.’ ‘*Samui*’(be cold) in Japanese implies cold condition of ‘here and now’ rather than persons’ sensation. It could be justified by the fact that Japanese people do not say , ‘*Watashi wa samui*’ (I am cold), ‘*Anata wa samui*.’ (You are cold). In other words, Japanese speakers do not refer to the first or the second person pronouns. Japanese people exchange feelings of being in the same *ba*. There is no opposition of the speaker and the addressee. This is the prototypical ‘inside the *ba* construal’. In this situation, this Japanese dialog is neither subjective nor egocentric. While, in the same situation, in English speakers would say ‘I am cold’ and ‘You are cold’ with first or second person pronouns. That is, the speaker has to stand outside of *ba*. That construal is prototypical ‘outside of the *ba* construal.’ Then speaker is located outside of *ba*, and observes the situation from his egocentric view.

In conclusion, we propose the paradigm shift also in the linguistic world from the paradigm of ‘causal relationship of entities’ and the dualism of ‘subjective’ and ‘objective’ to the paradigm of the interaction in the *ba*, that is, linguistics of *ba*.